

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成 25 年 6 月 14 日現在

機関番号：15401

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2010 ～ 2012

課題番号：22760488

研究課題名（和文） 19世紀東アジアにおけるイギリス商館建築の研究

研究課題名（英文） Architectural Study on British Merchants' Houses in 19c. East Asia

研究代表者

水田 丞（MIZUTA SUSUMU）

広島大学・大学院工学研究院・助教

研究者番号：40540406

研究成果の概要（和文）：

本研究の成果は以下のようにまとめられる。

- (1) 19世紀東アジアで最大の規模を誇ったジャーディン・マセソン商会の本店・支店の建築物について、同商会内部の文書を利用し、造営の実態の一端を考察した。
- (2) 19世紀東アジア開港都市のディレクトリー、領事報告、英字新聞から、各開港都市におけるイギリス商館の造営状況を検討した。
- (3) 中国の香港、上海、鎮江、台湾の淡水、高雄において外国商館の建築遺構を実地調査し、建築技術史、様式史上の知見を得ることができた。

研究成果の概要（英文）：

The results of this research are as follows;

1. Some detail of buildings of Jardine, Matheson & Co., one of the largest British firm in 19c. East Asia, has been considered referring to their own archival records.
2. I of British firms' buildings have been found in foreign directory, British consul's reports and English newspaper published in 19c. East Asia.
3. The architectural field survey has been carried out in Hong Kong, Shanghai and Chinkiang in China, and Tamsui and Takao in Taiwan, where some knowledge regarding architectural style and technology in European firm's buildings has been obtained.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,300,000	390,000	1,690,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
2012年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：建築史・意匠学

科研費の分科・細目：建築学 建築史・意匠

キーワード：19世紀，東アジア，イギリス商館

1. 研究開始当初の背景
オランダ、イギリスの東インド会社など、ヨーロッパの東アジア進出において商人達の

交易活動は重要な位置を占めていた。19世紀以降は各国の商人たちが商会組織を結成し、香港、上海などの中国沿岸都市、日本の外国

人居留地に店舗を構え、国境を越えて活躍した。ヨーロッパの19世紀東アジア進出の中心にあった商人達はどのような店舗を構え、そしてその建築に際し何を考えていたのか、代表として2つのイギリス商會を事例にとり、建築史資料としての利用が少なかった商會内部の資料と領事報告を駆使して、この課題を考察する。

2. 研究の目的

17世紀頃に始まるイギリスのアジア進出の中心は貿易活動にあった。19世紀の東インド会社解散後は同国の商人たちが商會組織を結成、著名なアヘン戦争など歴史的イベントにも深く関わった。1842年に植民地の香港、条約港の上海ほか5港へ、1859年には開港後の日本へ進出、外国人居留地を拠点に交易活動を展開した。

彼らの交易活動の舞台となった外国商館の建築的実態の解明は、東アジアへの洋風建築移入の嚆矢として、建築史学上大きな課題であり、写真、絵画や新聞、国内所在資料などを参照して日本国内（桐敷真次郎『明治の建築』、坂本勝比古『明治の異人館』）、中国の開港場（村松伸『上海・都市と建築』、泉田英雄「1860年代中国のコロニアル建築について」）、と先達の考究が重ねられてきた。結果、香港や上海、横浜や神戸における外国商館の姿が明らかにされ、その外観意匠の共通性などが明確となった。だが、内部の空間構成や構法、さらに商館建設に対する計画意図など、判然としない点も残されている。他方、社会経済史や外交史の分野では、建築史では利用例の少ないイギリス商會内部の文書や、イギリス領事報告を解読し、イギリス商會の国際的な交易活動が解明された（石井麻耶子『近代中国とイギリス資本』、Shinya Sugiyama, 'A British trading firm in the Far East, John Swire & Sons'）。その数は限られるとはいえ、申請者のこれまでの研究経験からみても、これらの資料中には彼らの営繕活動に関する記録も少なくないと期待される。本研究はこの点に着目し、イギリス人内部の資料から東アジアにおけるイギリス商館の建築的実態を考察するものである。

ではこの商會内部の資料を利用することで、19世紀の東アジアにおけるイギリス商館建築の研究として如何なる成果を期待できるであろうか。次に述べるように、イギリス商會の文書には各商館の営繕関連の記事も時々見受けられる。例えば、営繕時の図面といった直接的な建築資料の他、日常の報告においても壁の修理を相談する記事であれば、そこから工事年月、構法や材料を連想できる。これら商會内部の文書を丁寧に読み解き、同じく先達の利用が多くない議會文書が含む

各港の領事報告と既知の画像資料等により客観的に補強することで、外観からは知り難い内部構成や構造、材料といった知見を得ることが第一に期待できる。

次に、商會内部で取り交わされた内容を通じて、ソフト面の知見、すなわち、自分たちの商館を建築、維持するにあたり、イギリス人商人たちが何を考え、どのような要望を抱いていたか、というコンセプト的な部分への踏み込んだ考察が期待される。たいていの建築が設計者や大工のコンセプトのみで実現することはあまりないし、特に高度な専門技術者が少なかった19世紀の東アジアでは施主の意思が建築の計画に大分影響していたと想像される。それは意匠や間取りへの希望もあれば、予算や工期といった現実的要求もあったであろう。まず行うことはイギリス商館の建築的実態の実証的解明であるが、ソフトの面まで含めて当該期のイギリス商館を読み解くことは、寡聞な申請者が知る限り、先学の言及はあまり多くなく、挑戦する一定の価値があると考えている。

3. 研究の方法

本研究課題の主要な作業は2点あり、一つはイギリスでの商會文書の調査、一つはイギリス議會文書の閲覧による19世紀東アジア開港場関係の資料的補強である。

ジャーディン・マセソン商會（JM商會）文書とスワイヤ文書はそれぞれケンブリッジ大学図書館、ロンドン大学SOAS図書館に所蔵されるのみで、現地での閲覧を行うより他にない。そのため3ヶ年の計画で毎年夏季休業と春季休業各々1ヶ月の文献調査を計画した。

また、イギリス議會文書はアイリッシュ・ユニバーシティ・プレスより“British Parliamentary Papers: BPP Area Studies”として刊行本化されているので、東アジア関係の巻号を購入、海外調査以外の期間に丁寧に読み解いていきたい。

またこのほか、関連する遺構の調査、当時の英字新聞、ディレクトリーの調査等も必要となる。

以下、各年の具体的な研究の方法を整理して報告する。

[2010年度]

(1) イギリス商會文書の調査。9世紀東アジアのイギリス商館建築を、イギリス人商人の視点から考察する本研究では、イギリス商會文書の閲覧が根幹的な作業となる。この資料は膨大なことも予想されるので、調査期間や対象を工夫して効率的に閲覧する。

(2) 領事報告、英字新聞、日本語文献の閲覧。イギリス商會文書が重要な資料とはいえ、これだけを鵜呑みにするのではなく、毎年の領

事報告や新聞、日本人側の資料も適宜参照することによって、一方の資料だけに頼らない、客観的、実証的な研究を心がける。

(3) 関連遺構の踏査、古写真等の収集。コンセプトという概念的課題を扱うゆえに一層、文献から知り得た内容を、類例遺構や古写真など、実際にできた建築物との照合を常に行って、文献のみに溺れることのないように注意する。

(4) 研究成果の公表。以上収集した資料を総括して考察し、研究成果は速やかに論文としてまとめ、それを通じて建築活動の国際化への理論的貢献を目指す。

[2011年度]

(1) 昨年度収集した資料を整理し、今年度の資料収集に向けて課題点を抽出する。資料は主にルーズリーフに手書きで筆写してきたものだが、研究の効率を考え、データベースの構築も検討する。

(2) 期間の前半にイギリス議会文書のうち、19世紀中国関係の巻号を購入し、これを閲覧する予定である。同文書には19世紀中国沿岸の開港都市に所在したイギリス領事報告が含まれており、そこから各開港都市に所在したイギリス商人たちの商活動や建築活動について調査したい。

(3) 春休みを利用して、一ヶ月間ほどイギリスに渡航。ジャーディン・マセソン商会文書（ケンブリッジ大学図書館所蔵）と香港上海銀行文書（ロンドンHSBCアーカイブ所蔵）を閲覧する。なかでも研究の目的に従って、主に上海関係の資料を集中的に精査し、二商会の建築物に関連する資料を収集する。

[2012年度]

(1) イギリス議会文書に含まれる在中国の開港都市・イギリス租界から提出された領事報告を読み解き、イギリス商館の建設状況を含む各開港都市の整備状況を把握する。

(2) 「ノース・チャイナ・ヘラルド」、「チャイナ・メール」といった英字新聞から、イギリス商館建設に関する記事を収集する。

(3) イギリスでの文献調査を行い、ジャーディン・マセソン商会文書などのイギリス商会内部の資料から、商館の建設、維持管理に関する資料を収集する。

(4) 香港、上海、鎮江などの旧イギリス植民都市、旧租界の実地調査を行い、関連する遺構や史跡地の踏査、また可能であれば在中国の資料についても調査を行う。

(5) 研究の成果を2012年12月に開催が予定されている東アジア建築文化国際会議において発表する。

4. 研究成果

本研究は3年にわたって実施し、各年度の研究成果は以下のようにまとめられる。

[2010年度]

(1) 研究期間の開始にあわせて、英国議会文書BPPのうち、日本関連分10巻を購入した。同巻には、幕末から明治初期の横浜、神戸、長崎といった各居留地のイギリス領事報告が収録されている。本年度はこれを閲覧し、各居留地における建築活動やイギリス商人たちの商活動にかんする記録をたどり、関連する情報を整理した。

(2) 事前に行った資料調査の成果をまとめ、ジャーディン・マセソン商会横浜店について、慶応年間の大火で焼失した商館の再設計面と、同じ大火で焼失した石造倉庫の再建に関する論文をそれぞれ執筆した。これまで明らかでなかった外国人居留地における外国商館の建築経緯を詳らかにするとともに、商館の再建にあたってイギリス商人たちがどのようなことを考えていたかという問題についても論及した。2つの論文はともに日本建築学会計画系論文集の8月号に掲載された。

(3) 8月から9月にかけてイギリスで資料調査を行った。ロンドンのHSBCアーカイブを訪問し、19世紀東アジアのイギリス資本を代表する香港上海銀行の店舗建築に関する資料を収集した。調査の結果、香港上海銀行に関して19世紀の資料は当初期待していたほど多くなく、20世紀初頭まで多少幅を広げて扱う必要性を感じた。また同時にケンブリッジ大学図書館を訪問し、ジャーディン・マセソン商会文書を閲覧、同商会の宅地建物に関連する資料を収集した。

(4) 中国最大の開港都市である上海において外国商館の建築遺構の調査をおこなった。

[2011年度]

(1) 19世紀の東アジアで活躍した外国商会のうち、最大の規模を誇ったジャーディン・マセソン商会の商館建物や宅地等の不動産、そして建築工事を手掛けた建築家、大工等の活動を把握するために、ケンブリッジ大学図書館において同商会の文書の閲覧を引き続き実施した。今年度は東アジアの開港都市各地に建設された事務所の平面図や立面図、また、大工や建築家との契約書類、そして商会管理の宅地建物、中国人向け借家にかんする造営、メンテナンス、賃貸経営や衛生管理に関する書簡や報告書類などを閲覧することができた。ただ、収集しえた情報は断片的であるため、今後は建築家や各支店間の書簡類、また社史等の刊行資料との照合を行い、資料の評価や各地の事務所の建設経緯を整理する必要

がある。

(2) 19世紀中期から後期の日本の開港都市（横浜や神戸）、また香港や上海で発行されていた英字新聞、ディレクトリーを通読し、外国商館の建築にかかわる新聞記事の収集をした。また、ディレクトリーの記載内容から、各開港都市における主要な外国商会の支店設置年をとらえることを試みた。情報量はきわめて膨大なため、次年度以降も引き続き閲覧を継続していきたい。

(3) 明治初期の日本で活躍した外国人技術者マクヴェインを顕彰するシンポジウムにおいて、幕末明治初期の日本の近代化とイギリス商会ジャーディン・マセソン商会との関係について、研究事例の発表を行なった。専門分野を異にする各地の研究者から有益な意見や情報をうかがうことができた。

(4) 中国の開港都市のひとつである鎮江において外国商館の建築遺構の調査をおこなった。

[2012年度]

(1) イギリス議会文書B P Pのうち、1878年から1899年の在中国の領事報告を含む巻号を購入し、各開港場におけるイギリス人商人たちの動向や都市整備状況を把握した。

(2) 外国人・機関名鑑（ディレクトリー）の1860年ころから1920年ころまでを通覧し、各開港場におけるイギリス人商人の進出状況を把握し、商館の造営時期をたどる手掛かりとした。

(4) 香港や上海で発行されていた当時の英字新聞を通読し、各開港場におけるイギリス人商人たちの建築的な活動状況を把握した。

(5) 19世紀東アジア最大の規模を誇ったジャーディン・マセソン商会の文書を通覧し、同商会の各支店建物の建設経緯、仕様について復元考察を行った。また、その内容の一部を、アジア近代建築・都市史研究会や東アジア建築文化国際会議において発表した。

(6) 台湾の開港都市淡水と高雄、そしてアジアのイギリス植民都市香港において外国商館の建築遺構の調査をおこなった。

5. 主な発表論文等

（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

[雑誌論文]（計3件）

(1) Susumu Mizuta, A study on Jardine, Matheson & Co.'s branch buildings in the Far East: 1842-1929, Proceedings of East Asian Architectural Culture International Conference, 査読有, 巻無し, 2012, code 2-A2

(2) 水田丞, ジャーディン・マセソン商会横

浜店の商館再建計画—慶応大火による被災から新商館入居までの経緯を中心とした考察—, 日本建築学会計画系論文集, 査読有, 75(654), 2010, 2007-2012

(3) 水田丞, ジャーディン・マセソン商会横浜店の石造倉庫と配置計画—慶応大火後の石造倉庫再建を中心とした建築活動の詳細と計画意図—, 日本建築学会計画系論文集, 査読有, 75(654), 2010, 2013-2019

[学会発表]（計2件）

(1) 水田丞, 十九世紀東アジアにおけるジャーディン・マセソン商会の商館建築の研究, アジア近代建築・都市史研究会 mAAN Studies, 2013年6月30日, 京都大学稲盛財団記念館

(2) 水田丞, ジャーディン・マセソン商会と日本の近代化, 工部省測量司長マクヴェインと明治日本: マクヴェイン没後百周年記念国際シンポジウム, 2013年2月18日, 東京大学生産技術研究所

6. 研究組織

(1) 研究代表者

水田 丞 (MIZUTA SUSUMU)

広島大学・大学院工学研究院・助教

研究者番号: 40540406

(2) 研究分担者

()

研究者番号:

(3) 連携研究者

()

研究者番号: